

AND と BUT：関連性理論の意味論と語用論*

武内道子

序

言葉によるコミュニケーションに推論の重要性を持ち出した Grice 以来、語用論イコール推意の研究という図式が出来た。Grice は協調の精神と格率によって説明される発話理解の側面は推意として分析されるべきものと想定し、会話の推意と「言われたこと」の間に区分を引いた。前者は発話の真理条件に関与しないこと、および、言語形式の持つ意味は真理条件的、すなわち命題形成に貢献するものであって発話の非真理条件的内容には関与しないと考えた。これらの想定はいずれも維持できないことを関連性理論は主張する。関連性理論のチャレンジとして、第 1 に推意だけでなく、発話の表出命題形成にも推論および語用論的原則が働いていること、第 2 に、言語形式の意味は発話の非真理条件的側面にも関与することを提示した。

第 1 のチャレンジは、言語表現の明示的に表出される側面である命題内容の構築のプロセスに関するものである。これが語用論的に決定されることが極めて多いという考えは発話の明示的対非明示的区別 (explicit-implicit distinction) という語用論上の区別と関連する。この区別は話し手の伝達しようとする意味の両輪となるものであると関連性理論は主張する。本稿は、発話の明示的側面である表出命題 (表意) を非明示的側面 (推意) から区別する際の問題を、and によって考察する。第 2 のチャレンジは、言語表現のエンコードされた意味の中に真理条件的に定義されないものがあるという関連性理論独自の考えに支えられている。語用論へのインプットとなる形式の記号化された意味が、全くタイプの異

なる 2 種に区別される (conceptual-procedural distinction) ことを but によって論じる。

以下、通常のやり方とは反対に、関連性理論の語用論からはじめ、意味論の考察が続く。語用理論が発話解釈（意図明示的行為一般）に含まれている認知的過程をどう説明するかを提示し、それと連動する適切な意味論の概念を提示する。二つの事を主張したい：(i) 発話における and の意味はその最小の記号化された意味と語用論的に決定される意味との合成であり、一方、but は発話解釈の推論的側面に制約を課す情報を記号化した言語形式である。(ii) And は一つの発話 (conjoined utterance) として、つまり 2 つの連言肢は独立して関連性を有するのではなく全体が一つの発話として、関連性を有する。一方、but は第 1 の連言肢の解釈が第 2 の連言肢の関連性に貢献する、それぞれが独立して関連性を有する談話連結語 (discourse connective) である。

I. 発話解釈と関連性

1-1 関連性の二原則

本稿の拠って立っている理論的枠組みである、Sperber and Wilson (1986/95)による関連性理論の基本的主張について概観する¹。人間がお互いの行為を解釈するという認知行動を律している基本的想定に、発話解釈も立脚していると考えているが、それは一言でいうと、関連性志向であるということである。人間の認知システムは関連性を最大にするよう志向している。われわれは自分にとって関連性のある情報のみに注目を払い、関連性のあるコンテクストでこれを処理し、結果として、認知環境に何らかの改変がもたらされることを期待している。もし新しく入手した情報が、すでに内在している一連の情報ないしは想定と触れ合えば、そこに新しい知識として認知上の実りがもたらされるであろう。もしその情報がすでに持っている想定の実性に更なる証拠を与えれば、あやふやであった知識はより確固としたものになろう。あるいは、矛盾するものであった場合、それを破棄させ、新しい想定と置き換えられることになろう。こういった認知環境の改変を認知効果として定義すると、効果が大きければ大きいほどその入手した情報の関連性があるということに

なる。認知システム全体と情報授受との関係についての原則を「関連性の認知的原則」として次のように規定している (Sperber and Wilson 1995)。

Cognitive Principle of Relevance:

Human Cognition tends to be geared to the maximization of relevance (262).

Sperber (2000) と Wilson (1999) は人間の認知システムは関連性を最大限に得られる方向に常に進化していると考えている。これは感情、知覚、信念、意図、思考などをつかさどる「心の理論システム」(Theory of Mind) の原則であり、一つのモジュールをなすと考えられる。

しかしながら、認知効果はただで得られるものではない。その情報を処理する際労力が要求されると考える。そして同じ効果が得られるならば、少ない労力で済むことをわれわれは望むものである。すなわち、処理に要するコストが少なければ少ないほどその情報の関連性は高く、逆に、ある認知効果を引き出すのに要求されるコストが多いほど、その情報の関連性はより低くなる。発話というのは、その情報が相手にとって関連性がある、したがって認知上の報酬があることを伝え、相手の心的労力を要求するものであり、受け手(聞き手)は認知効果という報酬の期待があるからこそ発話解釈にあたるのである。これを「関連性の伝達的原則」と呼ぶ。

Communicative Principle of Relevance:

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance (271).

聞き手が復元する解釈は (a) 注目を保証するだけの認知効果をもたらし、しかも (b) その際正当化されない処理労力を課さない解釈である。それこそ話し手の意図した解釈であり、最適関連性を有する (optimally relevant) 解釈と呼ぶのである。この伝達に関する原則は言葉によるコミュニケーションについて当てはまるものであり、認知の原則の下位モジュールである発話解釈モジュールの原則として考えられるものである。

最適関連性の見込みを伝達するということがあらゆる意図明示的発話解釈を律している規範であるとすれば、当然話し手、聞き手双方が責任を負う。話し手が、聞き手の復元しやすいよう言語形式を選択し、しかも満足の行くレベルの効果が達成されると期待したものを、聞き手が最小の労力で得た最初の解釈が、正しい解釈、すなわち話し手の意図した解釈であると考えられる。発話解釈は瞬時に成り立つもの、あるいは時として失敗するのも瞬時であることを考えると、聞き手はいくつかの解釈を比べてひとつを選ぶとは考えられない。最も労力の少ない道をたどるよう仕向けられている聞き手であるから、即呼び出された解釈が自分の関連性の見込みを満足させれば、そこで解釈作業は終わると考えるのである。

効果と労力の掛け合わせという理論の意味するところを、and に相当する日本語の「て」で見してみよう。日本語の and 相当語はいくつか形式がある。名詞と名詞を連結する「と」「や」「に」は別にして、文(動詞句)を結ぶ場合を見してみよう。

- (1) a. She went out to the garden and picked some flowers.
 b. I was tired and went to bed early.
 c. He hit her sister and she cried.

(a) と (b) は「て」が自然に続くが、(c) は「て」だけでは落ち着きが悪く、「彼が妹をたたいて、それで／そのため彼女は泣いた」のように接続表現が加えられたほうが自然である。(a) の場合、「庭に下りてそして(それから、そこで)花を摘んだ」とすると、「花を摘む」ことが何か日常的でない、特別なこととして解釈されよう。(b) も同様に「疲れていて、それで早く寝た」というと、たとえば「昨晚電話をしたとき出てこなかった」ことを問われた状況で、早く寝ることが普通でなかったことを伝えると思われる。「それで」あるいは「そして」は余分の処理労力を聞き手に与えることになる。一方「て」は最小の労力で二節の関係を復元させることになり、それは最適関連性を有する解釈を求める聞き手にとって、即呼び出しやすい解釈(すなわち、(a) では「庭に下りてから、そこで花を摘んだ」、(b) では「疲れていたので、そのため早く寝た)であるということである。普通でない、予測しない結び付けを意図する話し手は「そして」あるいは「それで」を使用し、聞き手は「て」で得られない余分

な効果を，余分な処理労力と引き換えに手にいれることになる。(a) と (b) は主語が同一で動詞句を結び付けているのに対し，(c) は文と文を結んでいる。すなわち，(a) と (b) の **and** で結ばれた第 1 肢と第 2 肢は統語上 S 節点が少ないだけ (c) より単純な構造をしている。第 1 肢と第 2 肢の主語が異なる (c) の場合は，(a) と (b) と異なって，もはや「それで」の使用によって特別な，予期しない意味はないということになる (Blass (1990) 参照)。特別の効果というのは一方が他方より処理労力がかかるといような発話の選択があるときにのみ起こるのであって，最適関連性の概念によって説明されるのである。

1-2 二つの記号化された意味

発話解釈を認知システムに立脚して説明することは二つの心的過程を区別することになる。すなわち，言語形式の解読過程 (**decoding**) と語用論的推論過程 (**inference**) である。言語記号解読は音声表示を，一連の音韻的，統語的，意味的計算によって，命題に準じる (**sub-propositional**) 概念的表示である論理形式 (**logical form**, 以下 **LF**) へと変換する。この表示が一連の語用論的計算へのインプットとなり，呼出し可能な想定と組み合わせられて，話し手の意図した (完全) 命題想定は何かについて仮設を作りながら処理にあたり，認知効果を生じせしめる。推論過程へのインプットとしての論理形式は無限の異なったアウトプットを持ち出しうる。

発話解釈に概念表示と表示算定という 2 つの側面があるということは，言語形式のもつ意味を二タイプに区別することになる (Blakemore 1987, 1990, 1992, 1997)。大抵の単語は概念を記号化し，**LF** を形成し，さらに概念を足していくことによって完全命題を構築することに貢献する。一方，この概念表示に貢献せず，概念の論理的関係を構築する際使われる推論の道筋を指し示すことに特化している言語形式がある。これを手続き (**procedure**) を記号化しているという。(2) によって例証して見よう。

- (2) (のどの乾いた狐が葡萄の木を見つけ，さんざん取ろうとやってみたがうまく行かなかった挙句)： どうせあのおどろは酸っぱいに違いない。

- (3) a. あの葡萄はすっぱいに違いない。
 b. [ぶどう] x すっぱい
 c. あれはすっぱいに違いない。

(3a) の命題は 2 語がその記号化されている意味を構造的に構築した (3b) のようなものである。(正確には、記号化された概念は後述する富化過程という語用論的操作によって調整される)。(2) の文は「どうせ」という談話連結語が余分に含まれているが、これは表出命題に含まれないと考えられる。ここでの主張は「どうせ」が概念としての意味を有さず、その命題が構築される際働く推論の道筋を指示する意味、すなわち手続き的意味を有しているということである (Takeuchi 1997; 1999 参照)。一方、(3c) は (3a) と同一命題を表出している。つまり代名詞や指示詞というのは指示対象を聞き手に探させることへの制約を記号化していると考えられる。「どうせ」も指示表現も共通して、発話解釈の過程で聞き手に語用論的推論の方向を導く意味機能を有している。違いは、指示表現は表意を構築する際働く推論に制約を課すもので、したがって真理条件的であるのに対し、「どうせ」のような談話連結語は推意への制約を課すということである。概念的対手続き的という情報の二タイプの区別を初めて主張した Blakemore の考察は *but, therefore, after all, so, moreover* のような談話連結語の推意への制約に限られていた。その後、概念的・手続き的区別は、伝達の明示的側面・非明示的側面と真理条件的・非真理条件的側面とクロスカットすると考えられてきた (Wilson & Sperber 1993a 参照)²。

手続き的情報を有する言語形式の存在は、意図された効果をできる限り少ない処理労力で得させたいという話し手のもくろみに沿うものである。処理労力は解釈算定過程で必要とされるものであるから、解釈の方向を指示することによってこの過程に制約を課すことは、処理労力節約に通じるものである。概念と手続きという二種の記号化の区別はこの基盤に支えられるものである。3 節において *but* が意味論的に手続きを記号化していることを提示する。

1-3 表意と推意

ここまで発話の持つ意味として 3 レベルが区別されることが示唆され

た。(4a)の発話を使って例証しよう。

- (4) a. その教室は狭すぎます。
 b. 神奈川大学横浜キャンパス 20 号館 301 号室は受講者が 150 名を越す英語史の授業を行うには狭すぎる。
 c. もっと大きい教室に変えてほしい。

まず言語形式の単語の意味とその配列から導かれる意味 (what is encoded) がある。これは話し手の意図した意味内容に程遠い。(4a)の聞き手は、「その教室」がどの教室か、「何をするのに狭いのか」を復元してはじめて話し手の意図した意味 (what is said) である、たとえば(4b)のような事象の真偽を問える意味内容 (表出命題) に達する。しかし話し手の伝えたいことは(4b)の表出命題だけではない。(4a)の発話によって(4c)のようなことを含意している (what is implicated) と考えられる。関連性理論は(4b)を表意 (explicature), (4c)を推意 (implicature) と呼び、話し手の伝達しようとしている意味を2つに区別する。前者は第1の言語的意味の上に推論を働かせて得られ、後者は発話によって伝えられる他のあらゆる意味を指し、推論のみによって得られる。

(4b)を導出するために、聞き手は文法が提供する(4a)の上にコンテキスト情報を構築していく。つまり発話の言語的特性と聞き手が復元する命題とはつながりがある。一方(5)におけるBの発話の言語的特性 ((4a)と同じであるが)と、Aの質問の応答としての聞き手が導出する命題 ((4b)と同じ)との間にはつながりはない。

- (5) A: 教室を変更したいのですか。
 B: その教室は狭すぎるのです。
 (6) 英語史の授業を行なうのにその教室が狭すぎるということはそれより広い教室に変更してくれることを望んでいる。

聞き手は話し手の表出したとみなす(4b)の命題に(6)のような文脈想定を補って(4c)を導出する。言い換えれば(4c)のような推意は、聞き手が表出命題を導出した場合にのみ導出できるのである。さらに(5)Bの発話により聞き手Aは(6)の想定を即座に呼び出すことになり、適切な認知

効果を生み出すのであるから、話し手が意図した解釈とみなされるのはこの解釈のみである。

一つの思考を言語形式に載せるとき、どの程度明示的に言語化し、どの程度非明示的に言語化しないで残すかという区別を問題にしているわけである。Sperber & Wilson (1986/95) は明示性について次のように定義する。

- (7) **Explicitness:** An assumption communicated by an utterance U is explicit if and only if it is a development of a logical form encoded by U. (182)

この定義が与えられたら、(4a)でもみたように、**explicit = encoded** という観点は成り立たず、しかも話し手は常に完全命題を伝達するのであるから、言語形式のもつ意味と意図された伝達内容とはかなり（しばしば大いに）かけ離れているといわなければならない。ここに発話の3レベルの区別、(a) 記号化された言語的意味（意味論）、(b) 明示的発話の意味（語用論的に (a) を発展させて得られたもの）、(c) 語用論的推論による非明示的発話の意味が必然のこととして捉えられよう。2節において **and** 発話によって、記号化された意味と話し手が明示的に伝達しようとしている内容の隔たりがどんなものであるか、その隔たりをどう埋めるのかを検討する。

1-4 Grice のやりかた

ここで Grice の言われたこと (**what is said**) と含意 (**implicature**) の区別と関連性理論との違いについて触れておきたい。Grice (1975) にとって、「言われたこと」は記号化された意味に一義化と指示付与を含み、発話の真理条件内容、すなわち表出命題に等しいものである。一方、含意は「言われたこと」に属さない他の伝達するよう意図された意味 (**what is implicated**) で、慣習的含意 (**conventional implicature**) と会話の含意 (**conversational implicature**) の2種を区別する。いずれも非真理条件的であり、したがって命題内容に貢献しない。後者は発話の記号化されていない意味を協調の原則と格率に照らし合わせて導出されたもので、慣習含意は言語的に記号化されているもので（たとえば **but** や **therefore**）

一般的な推論原則によって復元されるものではない。(8) を例に Grice の分析を試みてみると、

(8) It is too small.

(9) 言われたこと：ROOM_x IS TOO SMALL AT _t³

含意されたこと：Room change to a bigger one is necessary / requested.

Grice の「言われたこと」は明らかに話し手の伝達しようとした意味の 1 部をなすが、(8) は意図した命題内容を表してはいない。「何をするのに狭すぎるのか」が復元されなければ真偽を問えないであろう。また話し手の意図したことが言語形式の命題と一致しない場合、たとえばアイロニーやメタファーはどう説明するのか。

(10) You're a genius.

(11) You're an idiot.

たとえば (10) はドジをした私に向かって私の主人が言ったとしよう。話し手の言いたいことはその表出命題でないことは明らかであるが、伝達しようとした命題 (11) は含意としてどのように導出されるのか。そもそも (10) の話し手は「偽と信じていることを言うな」という格率に違反しているし、(11) のような反対の命題を伝えようとして、なぜ (10) のように言うのかも説明されない。関連性理論では (11) を (10) の表意とし、表出命題とは区別する⁴。さらに (11) の含意は果たしてどの格率から導き出されるのか、「関連のあることを述べる」という仮定の下、聞き手が復元するとしても「関連のある」ということがはっきりしない。また (12) の 2 命題の解釈は「事象の起こった順序に話せ」という格率の適用には限界があることを示す例である。

(12) She cried. He hit her.

後続発話が先に起こり、そのことが先行発話の原因となったという解釈も可能である (Grice への反論として Wilson and Sperber (1981, 2000)

を参照)。

Grice の「言われたこと」の概念は、真偽の問える完全な命題と言い、その意味で意味論的構築物でありながら、語用論的推論の介在が認められる。関連性理論は後に詳述するように、言語的意味 (LF) と表出命題 (表意) のレベルを区別し、両者の間には大きなギャップがあり (underdeterminate), 後者は前者の上に人間の豊かな心的計算によって得られる、したがって語用論の作業の結果であると主張する。Grice が含意として分析した and の種種の意味は発話の、概念表示を構築する明示的側面に属し、一方慣習的含意とした but の意味は概念表示を構築する際働く心的計算の道筋を指し示す暗示的側面にかかわることを、2 節と 3 節で詳述する。

2 最小の意味論と表意 — And の分析

2-1 多義か一義か

まず、and の分析として語彙的多義の観点は避けられるべきことを見よう。次の各ペアの例文について、

- (13) a. Mary was pregnant and got married.
 b. Mary got married and was pregnant.
- (14) a. Peter left the room and the teacher scolded him.
 b. The teacher scolded Peter and he left the room.
- (15) a. The Japan Sea Coast is covered with heavy snow and the Pacific Coast has good weather.
 b. The Pacific Coast has good weather and the Japan Sea Coast is covered with heavy snow.

二つの連言肢 (P と Q) を入れ替えると、P, Q それ自体は同じ情報を記号化しているが、発話解釈に大きな違いが生じることがわかる。二連言肢の順序は P と Q に表されている事象が (13) では時間的順序の解釈が逆であるし、(14a) と (14b) では 2 事象の因果関係が逆になる。一方、(15) の場合は (a) と (b) は P and Q が Q and P になっても解釈は変わら

ない。ここでは (16) に示されるような論理演算子 & のもつ意味と等しい。

- (16) a. P & Q
b. Q & P

(16a) も (16b) も P が真で Q が真のときにのみ真であることが要求され、両者は真理条件的に等しい。And の機能を考察するとき (a) と (b) で真理条件が異なる (13) — (14) と (15) のいずれをも説明するものでなくてはならない。

ここまで and は (i) &, (ii) & then, (iii) & as a result という 3 つの意味に言い換えられることを見た。問題はこれらの意味が and の一部であるかどうかである。語彙的多義性は典型的には言語特定のなものである。たとえば bank は多義であるが、日本語の「土手」には多義はない。一方 and 連結発話の伝える暗示的意味はすべての言語で伝えられるもののようである。第 2 に、これらの暗示的意味は矛盾することなく取り消し可能である。(13a) を発してその因果関係を否認することは可能である。これは、たとえば “Mary got married, because she was pregnant.” という発話をし、「でも二つの出来事につながりはない」ということが出来ないうことと対照的である⁵。このことは問題の暗示的意味が、言語的に決められているものではなく、文脈に依存するものであることを示している。第 3 に、and の意味はこの 3 つだけではなく、いくつもの意味をもっていることがすぐわかる。その中には矛盾するものさえある。

- (17) a. He is rich and lives like a beggar.
b. He stood by the window and could see nothing.
c. It was dark and children went home.
d. I left the window open and there came a sweet smell of lilac.
e. We read his story and found it was a real tragedy.
f. Darling, you're wonderful, and how about dinner at Chez Panisse tonight ?
(Sweetser 1990)

(a) が「予想に反して」の意を持つのはいいとして、(b) は「予想に反し

た結果」(講談社『英和辞典』)でもあろうし、「動作の結果」ともいえようが、2つの事象が平行していたという解釈も成り立つ。(c)も結果プラス「Pの事象の中にQが含まれる」という意味になろう。(d)は結果というより単に「ライラックの香りが漂うことに貢献した」くらいの意であろうし、一方(e)は結果プラス「その過程で」、発話行為を連結している(f)は「そのことはいいとして、提案したいが」といった解釈を復元することになろう。多義であるとするれば **and** はいったいいくつの意味を持っているといえよいか。

多義性は非連結発話を見るといっそう否定的になる。

(14) c. Peter left. The teacher scolded him.

(14c)は(14a)および(14b)と同じ暗示的意味を持つ。**And**が多義であれば、同じ多義が非連結発話においても生じる理由が説明されなければならない。連結・非連結発話において同じ暗示的意味を伝えるという事実は、これが語彙的現象ではなく談話的現象であることを示している(Carston 1993 参照)。

意味論的多義性を否定し、**and**の意味論は Grice にしたがって真理演算子&と等しいとし、**and**の意味論的意味は一様、不変であるとする。すなわち最小の意味論を保持し、真理関数的意味から離れて多岐にわたって解釈される暗示的意味は語用論的作業によって導出され、その結果発話の表出命題(真理条件的内容)に貢献すると分析するのが関連性理論の説明である。さまざまな関係は、二事象間のつながりを話し手が含意し、人間の心がこのつながりを一つのシナリオへと構築するやり方を律している一般的原則を基に、聞き手が推論することによって得られると考える。二事象が与えられたら、そうすることが理にかなっていると思ったら、時間的に、空間的に、因果関係的に関係付けるのである。二事象の意味論的内容が与えられたら、(13)ではPの後に起こったとして、(14a)と(14b)はPの結果として(Pが原因で)、という解釈が第2連言肢の解釈として最もありうることということである。

2-2 表出命題：一義化と意味充足

P and Q を P & Q と等しいと仮定し、P と Q の間のさまざまな関係

は語用論上決まってくるものと仮定することは次のことを暗黙に了解している。すなわち、最小の言語的に記号化された意味 (LF) と文脈的推論のハイブリッドであること、したがって発話の言語形式のもつ意味と伝達される意味の間には大きな隔たりがあることである。このことを説明するのに、まず Grice のやり方で考え、次に関連性理論の考えを紹介する。

Grice にとって、and 連結で伝わる暗示的意味は含意であることを意味した。たとえば (18) を例にとると、Grice によれば (19) のように考える。

(18) She gave her husband her key and he opened the door.

(19) a. 言われたこと：P & Q

b. 含意されたこと：P TEMPORALLY PRIOR TO Q

二連言肢の関係は明示的にはシンメトリーをなす真理条件的内容である。協調の原則と「事象の起こった順序で話せ」と言う格率を守っているはずの話し手が伝えたいこととして (19b) が復元される。Grice の明示的内容、すなわち「言われたこと」は指示付与と一義化を含み、(18) は (18)' として解釈されることになる。

(18)' [She]₁ gave [[her]₁ husband]₂ [[her]₁ key]₃ and then [he]₂ opened the door.

しかしながら、(18) の聞き手は「彼が奥さんから渡された奥さんのかぎを使って」ドアを開けたということを話し手の意図として復元するであろうし、「彼は自分のかぎをいつもどこに入れたかわからなくなり大騒ぎする」といった言外の意味を推意として復元するかもしれないのである。And で伝わる意味が含意ではなく、表出命題の一部として扱われるべきことを示す例がある。

(20) It's always the same at parties: either you get drunk and no one will talk to you or no one will talk to you and you get drunk.

(D. Wilson よりとして Blakemore (1992) で引用されている例)

時の暗示的意味が推意ならば、P and Qは Q and Pと同義のはずである。しかし (20) には当てはまらない。「A か A」という単なる繰り返しではなく、命題内容が異なるものである。この例は推意による説明が間違っているという証拠であり⁶⁾、関連性理論は and の暗示的意味が表出命題の語用論的に決まる部分であるという分析を取るののである。推意とは、話し手の表出命題であると聞き手が理解する命題（すなわち表意）と文脈から導出される想定である。

明示的内容である表出命題そのものの同定、すなわち真理値の評価が可能な命題を復元するためにも、文脈依存と推論が欠かせない。記号化された意味は大きな手がかりではあるが、真偽の問える命題には程遠く、推論によって復元されるべき多くのことが残されている。関連性理論の枠組みでは表意を得る語用論的側面として 4 つの作業を区別する。そのうちここでみる 2 つの作業は、発話の明示的内容を決めるのに一般に了解されていると考えられるものである。Grice(1975, 44) も、

- (21) a. They are in the room.
 b. The dogs must be carried. (Blakemore (1992))

(21a) を理解するには、少なくとも they が何を（誰を）指すのか、the room がどこのことなのか語用論的に明示的にされる必要（指示付与）があり、(21b) では二つの読みのうち一方が同定（一義化）されなければならないと明言している。ロンドンの地下鉄利用者には (21b) が、利用者が犬を連れていなければならないと解釈されるべきだと考える人はまずいない。意味充足の一部をなす指示付与は、たとえば代名詞のような言語要素があり、LF の中で位置を与えられ、文脈的に充足されるものである。

意味充足 (saturation) は (21a) のような明示的指示表現の価値を決めるだけでなく、もっと広い作業が含まれる。(22) にある発話はいずれも、

- (22) a. Red is better.
 b. I am going to be late for my class.
 c. It looks the same.
 d. A: Take out? B: Here.

その LF が語用論的に発展されなければ命題の真偽を問えない。(a) は「白ワインより」、(b) は「自分が教えているクラスに」、(c) は「10 年前と」といった解釈を復元するかもしれない。また極度に省略された (d) は記号化されている命題はごくわずかであることを示すよい例である。所有表現や better や same (too, enough など) は、明示的に発音された要素はないが、文法的に、言語的に要請される方向が LF に含まれていると考えられ、このスロットを埋めていく作業 (linguistically mandated completion) が意味充足と呼ばれるものである (Carston 2000b, 6-8)。

2-3 表出命題：自由富化

しかし聞き手の目的は単に真理値の評価ができる命題の復元のみにあるのではない。(23) を考えてみよう。

- (23) a. He has a temperature.
b. My son Hiroki has a higher temperature than usual.

発話の言語的意味と指示付与のみに基づけば、(23a) の聞き手は自明的に真である命題しか復元できないであろう。人は誰でも熱があるのは言わずもがなであって、このままでは情報として意味があるとは思えない。話し手が伝えようとしていることは、もっと特定化された命題である。適切な認知効果を生む情報を話し手は提示しているとの仮定に基づき、聞き手はもっと完全に特定化された命題 (23b) を復元する。そうやって初めて聞き手が文脈想定を呼び出すことが出来、したがって認知効果を得ることが可能となるのである。

(23) の発話はスロットのない意味展開の例である。LF に記号化されている意味の上に、言語的に要請されてはいないのに概念を足していくという意味で自由富化 (free enrichment) とよばれる。同じ現在完了形を用いている次のペアの発話によってこれをもう少し検討してみよう (Wilson and Sperber 1993b の改例)。

- (24) a. I have had breakfast.
b. I have had frogs.

(24b) の聞き手は、話し手が人生の今までのあるときに蛙を食べたことがあることを意味していると理解するだろう。しかし、(24a) の話し手が今までの人生のうちのあるときに朝食を食べたことがあるとは理解しそうにはない。なぜか。(24a) の話し手が今までの人生のうちのあるときに朝食を食べたことがあるというのは真であろうが、これは通常聞き手の注意に値するほど十分な関連性を有しない。聞き手の注目に値する発話を話し手は発したはずだと聞き手は仮定し、話し手が (25a) の命題を表出していると解釈する。

(25) a. The speaker had breakfast a couple of minutes ago.

この命題は話し手が実際言った以上のことを含んでいる。(25a) は発話の、言語的に記号化された意味表示を越えて展開したものである。言い換えると、関連性の原理と調和する解釈の復元という聞き手の目的に沿った形でこの意味表示を富化した結果である。ここでは発話時から逆上ったあるときを同定するのに、数時間前と取られれば真であるかもしれないが、数日前と取られれば偽であろう。聞き手のタイムインターバルの同定は真理条件にも影響し、したがって認知効果にも影響する。(24a) と (24b) の違いは前者においてはタイムインターバルが急激に狭められなければならないということである。意味論ではその記述された事象の起こったのが宇宙の始まりにまで戻ることを指示し、語用論は述べるに値するほど最近起こったことと指示する (Wilson and Sperber 1993b) のである。

このような考えを **and** 連結発話に適用する。Carston (1988) によれば、背景的信念と関連性の原理があれば、聞き手は (13a) のような発話を、言語的意味にとどまらず、第 1 連言肢の時間指標の値を t とすると、次の連言肢の時間指標の値が $t + n$ となるように、連言肢の命題を復元する。復元される命題を (26) として表示する。

(13) a. Mary was pregnant and got married.

(26) Mary_i was pregnant at [t] and she_j got married at [t+n]

一般化すれば、連結発話の最適関連性を有する解釈は、その発話の第 2

連言肢が第 1 連言肢の解釈により決定された情報を含むものへと展開するということである。(1a)の発話においては, pick という動詞は前置詞句が義務的に必要というのではないが in the garden を含むと解釈する。

- (1) a. She went out to the garden and picked some flowers.

同様に (18) の連結発話の命題は (27) のように復元され暗示的意味も説明される。

- (27) [She]₁ gave [[her]₁ husband]₂ [[her]₁ key]₃ at [t] and [he]₂ opened the door at [t + n] using the [key]₃

そのコンテクストの中でもっとも自然な解釈は, 二事象間の関係が時間的に, 因果関係的にシナリオの一部をなしているというものである。発話解釈を導くレディーメードシナリオがないときはどうなるか。(28) はごく普通の, しばしば出会う事象のつながりと言にくい。

- (28) She gave her husband her handkerchief and he opened the door.

たとえば推理小説の中で出会ったら, 聞き手は彼が奥さんから渡されたハンカチは, 指紋をつけないように, ハンドルを包むために使うのだと頭をめぐらす。この解釈は 2 つの出来事をつながり構築する。読者は彼女がハンカチを差し出したことが何らかの方法で関連性を有するに違いないという期待をもつ。一方では 2 つの出来事を同時に起こったつながりのないものとしての解釈も可能であろう。富化作業は概念を足す作業であって, 明らかに真理条件に影響を与えるものである。

この考えに沿えば, (14) のような発話に暗示的意味が足されて, (29) のような表意を導出するにいたる富化過程は明らかであろう。

- (14) a. Peter left and the teacher scolded him.
b. The teacher scolded Peter and he left.

- (29) a. [Peter left]_i and because of that_i the teacher scolded him.

b. [The teacher scolded Peter] ; and because of that ; he left.

出来事が起こったということはそれに原因があったことを意味しない。それにもかかわらず、連結発話の最適の関連性を有する解釈は、第1連言肢の解釈によって決まる項を原因として述部に含むように第2連言肢が富化される解釈でありうるのである。

論理形式がいかに意味確定度が低いか、表出命題を同定するために聞き手がどういう意味拡充を行うのかを概略した⁷。意図明示的の伝達であれば適切なコンテキストにおいてその表出命題が表意と呼ばれるものである。And 発話も記号化された最小の意味内容を超えて、概念を加えながら真理条件的内容を話し手の意図したものへと特定化していくと関連性理論は主張する。その過程はいかなるものであるかを提示した。この説明に従えば、連結発話の、原因や時の暗示的意味は、あらゆる首尾一貫した談話を特徴付けるつながりの例である。つまり、これらの暗示的意味は一つの談話の一部の解釈により、利用可能となった情報の、次の談話の表出命題を確立する際の利用のされ方から生じる。とすると、これらの暗示的意味が連結発話または非連結発話によって伝えられうることは驚くに値しない。われわれの認知行動は原因と結果の構築、事象間に因果関係をつけるよう仕向けられているのである。

2-4 等位連結接続詞

連結発話と非連結発話の平行性が破られる場合がある。(14c) は (14a) と違って、第2発話の先生が叱ったほうが先で、第1発話が後に起こったという解釈、Peter が出て行ったのは先生が叱ったからだという解釈となる。

- (14) a. Peter left and the teacher scolded him.
c. Peter left. The teacher scolded him.

この場合、第1発話において話し手は問いを發し、第2発話によって答えるという考え方が出来よう。(30a)において、

- (30) a. We had a great meal in LA. We went to Rawly's.

b. We had a great meal in LA and we went Rawly's.

第 1 発話を聞いた後、聞き手はどこへ行ったのだろうかと推測し始めることが期待される。第 2 発話はこの問われた問いに答えることによって関連性を有することになる。And 連結 (14a) や (30b) ではこのような、第 1 発話によって問われた問いに答えることによって第 2 発話が関連性を有するという解釈は得られない。ではどう説明するか。連結発話は全体が一つの塊として提示されると考える。聞き手に 2 つの連言肢がつながって処理され、全体として関連性を有すると説明する。問いと応答というペアはこのジョイント処理を受けるものではない。たとえば **What time do you think I finished, and I finished at ten.** は受け入れられない。このことを Blakemore (1987) は次のように述べている。

- (31) This means that a hearer who is presented with a conjoined utterance cannot be expected to undertake the processing entailed by the use of *and* unless the conjoined proposition that is expected has relevance over and above the relevance of each conjunct taken individually. ... She can only assume that it is the conjoined proposition that is consistent with the Principle of Relevance. (120)

個々の連言肢はそれ自身関連性を有するのだが、関連性の原則が保証しているものは、個々の連言肢ではなく連結命題である。次の (32) の問いとその応答を考えると、No という応答が **How did you behave?** といった更なる (暗示的) 問いを生み、二連言肢の一つの塊のとしての処理がその否定の応答として関連性を有する。

- (32) Were you surprised at the time ?
No. We were very calm and we went down the stairs.
- (33) Where did your son do his graduate study in the States ?
a. He did his MA at Stanford and his Ph. D at UCLA.
b. He did his Ph. D at UCLA and his MA at Stanford.

また (33) は二連言肢の順序が関連性に関与しない例である。二連言肢はリストを作り，順序はどちらでもよい。一つの問いに対して一つの応答を提供し，全体として関連性を見込みを伝えると説明される。

連結発話においては関連性を見込みを，連結発話の命題全体が持っているということであるが，では連結発話において **and** が真理条件的演算子の意味を有するとして，その文法的，語彙的構造から含意される処理労力が如何に正当化されると考えるのか。連結発話が個々の連言肢のもつ関連性全体の上に効果を生み出すならば，処理労力は正当化されよう。連結命題全体が最適関連性を見込みを持ち，単一の語用論的単位として処理され，このとき一つ一つの連言肢が独立して処理された時に起こらない効果を生み出す。たとえば，(14a) では「もっともだ」，(30b) では「よく食べたものだ，信じられない」，(32) では「適切に振舞った」といった感情，いずれの場合もある種の話し手の態度を伝えることになる。このことに関しては4節でもう1度戻る。

3. 手続きの記号化：But の分析

3-1 談話における連結

発話の表出命題が聞き手の呼び出す文脈に依存していること，談話が首尾一貫的であるために意味関係が必ずしも明示的に具現化される必要はないことを，**and** の富化過程によって示した。しかし発話の解釈は単に表出命題を同定するだけでなく，発話の意図された認知効果を復元する問題でもある。とすると，先行する発話が，後続の発話によって意図されている認知効果を復元することを可能にするコンテキストを聞き手に呼び出させるということに，談話の首尾一貫性があると考えられよう。つまり首尾一貫性とは一つの発話の関連性がいかに他の発話の解釈に依存しているかということを示すことにあるといえる。たとえば (34) の連続発話 (Blakemore 1992) において，

(34) The knife slipped. I cut my finger.

(35) ナイフがすべるとナイフを使っている人が怪我をすることがある。

第 2 発話は第 1 発話の記述する事象の説明であることによって第 1 発話とつながっていると解釈される。その際 (35) のような文脈想定を呼び出すからである。言い換えると、特定の文脈想定を補うことによってのみ、聞き手はこの特定の連続を確立しうるのである。

新しい情報が関連性を確立するのは、常に当該の情報に関係付けられる文脈想定に依存するのであるが、聞き手が二事象間の特定の連結を確立するやり方を次の例で考えてみよう。

- (36) a. She is rich.
 b. She treats you.
- (37) a. She is rich. You see, she treats you.
 b. She is rich. Anyway, she treats you.
 c. She is rich. So she treats you.

(36a) の解釈により聞き手は (36b) の解釈のために即呼び出し可能な仮定を得るはずである。(36a) という文脈において (36b) をどのように解釈することが意図されているか不明のことがある。実際の談話では二発話の関係を特定化しないで並列して提示するのでなく、話し手は二事象間の関係について、自分の意図を何らかの言語的手段で（イントネーションも含めて）明らかにしようとする。話し手は談話連結語を用いて (36b) の解釈に制約を加えるのである。(37) の (a) – (c) は異なった解釈を受けることが示される。すなわち、(a) の ‘you see’ の使用は後続発話が第 1 発話の証拠として供されることを指示している。彼女がいつもおごってくれることを聞き手がすでに知っているはずだという示唆がある。一方、(c) の話し手は聞き手が、彼女がおごってくれることを知っていないことを示唆し、したがって ‘so’ は第 1 発話の結論として解釈するよう仕向けることになる。同様に (b) の ‘anyway’ は後続発話が第一発話の内容を正当化するものとして解釈するよう指示している。第 2 発話の関連性は第 1 発話の解釈に左右されることが理解出来よう。もちろんいずれの場合も、談話連結語を使用しなくても聞き手が後続発話の関係を復元することは可能であろう。話し手がこれらの形式の使用をするのは、特定の推論過程の際立ち (salience) を与え、意図した関係がひょっとして聞き手に明らかではないかもしれないというところで、こういう推論算定を行

うよう働きかけているのである。ここに働いているのは談話連結語の使用が処理労力節約につながり、聞き手が少ないコストでお目当ての認知効果を手に入れるという連動作用である⁸。

3-2 But の意味：期待否認

(37) の談話連結語は、命題形成そのものには預からないで、一つの命題の関連性が他の命題の関連性に頼っていることを示している。その使用は談話全体の一貫性に貢献することになる。But はこうした談話連結語の一つである。つまり第 1 発話の解釈が第 2 発話の命題解釈に制約を課するが、命題形成には貢献しないのである。ではどういう（手続き的）意味を記号化しているのか。

この問いに答える前に、Grice による but の分析を提示する。Grice によると、談話連結語の機能は、いわゆる低次発話行為 (lower-order speech acts) への、何らかの話し手のコメントとして「高次発話行為」(higher-order speech act) を遂行するものである。談話連結語によってリンクするコメントも異なるのであるが、but は二つの発話行為がコントラストという高次発話行為を話し手が意図していることを指示する。たとえば、

(38) She is rich, but she doesn't treat you.

(39) a. She is rich.

b. She doesn't treat you.

c. (a) contrasts with (b).

(38) の話し手は (39a) と (39b) の断言という発話行為を遂行し、同時に (39c) の情報を伝達しているというのである。彼によれば (39c) は慣習含意とよぶものである。Grice は談話連結語についてきわめて簡単にしか説明をしていない。関連性理論の立場から連結機能を遂行するという説明を考えると、2 つのことが問題となる。一つは but は発話の表意に貢献するのか、推意に貢献するのかという問いであり、二つ目は but は概念を有するのか、手続きを記号化しているのかという問いである。第 1 の問いへの答えは、高次発話行為動詞のもとへ (a) と (b) を包むといっているのであるから、(c) の命題そのものは表意であり、関連性理論の

枠組みでは推意というよりは高次表意に貢献すると考えられる。第 2 の問いに関しては答えるのは難しい。Grice 自身この区別をまったく考えていないのであるが、COTRAST という概念を記号化していると考えていると解釈してもよいかもしれない。つまり Grice は but を手続きでなく概念を記号化し、発話の表意に貢献すると考えているとみなしてよいかと思う。

関連性理論による but の記号化している意味の検討を (40) からはじめよう。

- (40) A: Prof. Yamada isn't at office today.
 B: a. Yes, he is.
 b. I saw him at lunch time.

A の発話に対して B(a) の応答は直接的否認である。一方 (b) は間接的にすなわち推意として否認している。既存の想定と矛盾する想定を提示された聞き手は証拠の少ない想定を放棄するが、(a) において B は単に A の発話が出示する命題と矛盾する命題を提示しているのであり、聞き手 A は自分より B の方がよりよい証拠を有していると考えられる場合のみ自分の想定を放棄するであろう。一方、(b) においては話し手 B は A の発話の出示命題と矛盾する命題が真であることの証拠を提示しており、この効果は聞き手がこれをどれほどのものかにかかっている。ここで話し手 B の意図は先行発話 (A の発話) によって伝わる想定を否認することであるが、この場合自分の発話が否認としての関連性を有するものであると示そうと but を前置することを考えるであろう。

次に (41) のペアを比べてみると、

- (41) a. Yamada comes from Osaka. He speaks standard Japanese.
 b. Yamada comes from Osaka, but he speaks standard Japanese.
 (42) Yamada doesn't speak standard Japanese.

(41b) において but の使用によって聞き手が、先行する発話 P から (42) の命題を文脈想定として導出したと期待される。But はそれが導く節が

(42) のような間接的に出てくる推意の否認であることを指示すると関連性理論は説明する。聞き手が「山田は標準語を話さない」という含意の導出を認める文脈想定を即座に呼び出したと、話し手が仮定する場合に **but** の使用が適切であるといえる。**But** がなければ (42) を呼び出さなかったであろう。その P の推意が **but** 節の内容 Q と矛盾することを聞き手に教える機能を **but** は有しているのである。

(41a) では第 2 発話の関連性は第 1 発話によって呼び出されたコンテキストにおいて処理されるが、それでも (41a) の第 2 発話を矛盾するものとして解釈できるのは、人間の考える自然なシナリオゆえである。(41a) においても (41b) においても、**but** のあるなしにかかわらず、意図した解釈が復元されるであろうが、聞き手の推論の方向を確実にしたいという話し手の思いが **but** の使用をさせるのである。言い換えれば、**but** は第 2 発話の解釈にあたって、推論過程の道筋の向かうべきところを際立たせる機能、すなわち推論の方向をポイントする機能を有していると言っているであろう。

話し手は **but** を使用することによって、第 1 発話から聞き手が導出した (42) の想定 R が、**but** に導かれる Q と矛盾するという指示を与えるということであるが、もう一步進めて、これを削除せよという意図をも指し示すと考えられる。**Although** との対比から主張できると思われる。

- | | | |
|------|---|---------------|
| (43) | It was raining but Peter went out. | P but Q |
| (44) | a. Although it was raining, Peter went out. | Although P, Q |
| | b. Peter went out although it was raining. | Q although P |

But と **although** はそれに続く節が先行節から導かれた想定と矛盾したものとして解釈されるときは常に相互置き換え可能のように思われる。(43) の P から引き出される想定 R (雨が降っているときは Peter は普通出かけない) が **but** によって導かれる命題 Q (Peter は出かけた) と矛盾すると解釈され、**although** 節でも同様である。(43) も (44) も何らかの否認を含んではいるが、**but** は P からの想定を否定する節を従えているのに対し、**although** はそれを含む節と P からの想定全体が否認されている。このことは Q の解釈と矛盾する **although** 節の含意 R は削除されないで保たれているということの意味すると考えられ、想定 R も伝達されるべく

話し手が意図したものであるということになる。(44b)はこの一時棚上げをよく示していると思われる。主節の解釈の際、推論が次に来る想定Pに続いていかないで、Pを解釈したあとで引き出されたRと主節の内容Qとが矛盾する事を知るのである。推論の一時棚上げはいわゆる発話行為における *although* の使用も証拠となろう。

- (45) a. Is it raining, although I'll have to go out anyway.
 b. *Is it raining, but I'll have to go out anyway. (Iten 2000)

Although がどんな手続きを記号化しているかは別にして、*but* は *although* との対比として P の推意 R が Q と矛盾するものであることに加えてこれを削除せよという指令を記号化していると主張してもよいであろう⁹⁾。

But の持つ意味として次のような手続き的意味を記号化していると考えられる。

- (46) 発話時に関係付けられる顕示的想定 R が *but* によって導かれる節と矛盾する、したがってこれを削除せよ。

想定 P が発話時に話し手、聞き手にとって顕示的 (*manifest*) であるのは P が表示され真であると受け入れられうるという場合である。(40b) や (47) にどう説明されるかは明らかである。

- (40) b. Yamada comes from Osaka, but he speaks standard Japanese.
 (47) It's midnight, but the pubs are open.

But 節 Q (標準語を話す、パブは営業している) は、先行する節 P (大阪出身である、真夜中である) と関係付けられる想定 R (山田は標準語を話さないだろう、パブは閉まっているだろう) と矛盾するからこれを破棄するよう、聞き手に指示する。P から導出される想定 R は真であると受け入れられる心的表示である。次のやり取りで、

(48) A: Do you have the time ?

B: But you have a watch !

(49) 悦子(今日もいつものように遅れてきて) : But it's only ten minutes late.

これは関連性理論の説明が Grice の分析に勝る一つの証拠となる。Grice のやり方は高次表意と関係する二つの発話を結ぶというのであった。しかし (48) と (49) に見られるように談話連結語は話のはじめに起ることがしばしばである。言い換えると、P but Q は典型的というより、1つのケースというべきものである。(48) と (49) で but が指示していることは当該のコンテキストにおいて顕示的である想定を否認(矛盾と削除)である。すなわち (48) では A の問いから来る「時間を尋ねるのは時計を持っていないからだろう」という想定を否認し、(49) では皆のまた待たされたという状況的想定と but 発話が矛盾するから削除するよう指示している。

さらに次のようないわゆるコントラスト用法についても (46) の意味を有していることが説明される。

(50) Linda isn't Chinese American, but she is Korean American.

But 以下が Linda is Chinese American という想定を否認していることは明らかであるが、問題はその想定が先行節 (Jun isn't Chinese American) によって一見顕示的にされていないということである。これは次のように説明されよう。(50) が発せられるのは「Linda は Chinese American だろう」という状況のもとである。すなわち、

(51) A: Linda is Chinese American.

B: She isn't Chinese American, but Korean American.

明らかに A の発話は Chinese American であることを顕示的にし、B はこの想定と矛盾することを述べることを指示するために but を使用し、A の信じていたことを破棄させることになるのである。

Lakoff(1972) は but は期待否認とコントラストの意味を持ち、多義で

あると主張し, Fraser(1998) は **but** の中心的意味はコントラストである (309) としている。Rieber(1997) もコントラストを伝える **but** をどう説明するかが問題であると述べている。しかしながら, コントラストという概念は言語的に記号化された意味によって決定されるものではない。たとえば,

- (52) a. Linda likes reading.
b. Jun likes to play sports.

(a) と (b) の間のコントラストは文脈想定の中で推論によって導出され, たとえば (53) のような対照的な文脈含意として解釈される。

- (53) a. Linda likes intellectual activities.
b. Jun likes physical activities.
(54) a. Linda likes reading and Jun likes to play tennis.
b. Linda likes reading but Jun likes to play tennis.

また対照的文脈含意は (54a) の **and** 接続詞からも復元される。(54) に見られるようなシンメトリー発話 (P と Q を入れ替えても意味が変わらないという意味で) において (a) (b) とともにコントラストの意味を伝えるのであるから, **and** と **but** の相互交換性は幻想に過ぎないといえる。つまりシンメトリー的対照であることを伝達するために, **and** を使用するコンテキストと **but** の使用が適切であるコンテキストとは異なるのである。数ヶ月間日本を留守にした私が日本に滞在しているイギリス人にこの冬の天候はどうだったかと尋ねたところ, (55) のように報告されたとしよう。

- (55) It was really cold before New Year and after New Year it was quite warm.

ここで **but** との交代が可能だとすれば, 尋ねた私が冬の間陽気はだいたい一定しているものだから従って一つの応答であろうと信じていると, 話し手が想定している場合であろう。正月以降あまり寒くなかった, したがって年明けの天候は旧年中と同じでないという推論を聞き手が働か

せるよう、話し手が **but** を使用し、正月以降常と違う陽気だったという推論を聞き手が行なうのである。むしろ (55) の **and** 発話こそコントラストを伝達していると解釈されうる。たとえば平行して (56) のような対照的な文脈含意を引き出すことになるであろう。

- (56) a. 正月前は天気は楽しくなかった。
 a'. 年明けてからは天気に関しては嬉しかった。
 b. 正月前はほとんど外に出なかった。
 b'. 年明けてからはよく外出した。

この分析が正しいければ、コントラスト **but** と期待否認 **but** を区別する必要はないということになる。(54a) と (54b) の類似性は表面的なものであり、それぞれの適切なコンテクストを考えれば消失してしまうものである。

3-3 推意への制約

先行発話を必要としない談話のはじめに起る **but** の使用を考えると、高次表意による分析、つまり「文脈的に手に入る想定と **Q** がコントラストをなす」という発話行為動詞や命題態度動詞を考えることができるであろうか。対照的に、意図されたコンテクストあるいは認知効果を得るのに貢献するという説明、すなわち手続き的分析の方が構築しやすいと思われる。**But** と **although** 間の微妙な違いも表意のレベルでは捉えられない。むしろ表意のレベルでは両者は等しく、しかも (43) と (44) は同じ解釈を受けないのである。

発話の推意には問題の発話が関連性の原則と一致するという聞き手の仮定を守るために、補わなければならない文脈想定が含まれる。しかし聞き手の呼び出す文脈想定に選択の余地がほとんどない場合がある。1-3 で示した間接的応答の例 ((5)) を思い出してほしい。**But** の導入する発話に関連性を有する解釈がどういうものかを示すため、話し手がこれを使用し、そのように発話を解釈するよう聞き手はある特定の文脈想定を補うことを余儀なくされるのである。このような表現は発話の推意に制約を課しているとみなされるのである。**But** の使用が、その発話の関連性を有する解釈の仕方を示すことになるのであるから、発話解釈にあたって

聞き手はある特定の文脈仮定 ((6) のような) を補わなければならない。つまり **but** は推意へ制約を課す表現である。関連性理論の枠組みにおいては聞き手はすべての発話を正当化し得ない労力を必要としないで、適切な認知効果を生み、最小で最も呼び出しやすいコンテキストで解釈する。最小の処理コストで正しい文脈選択を確実なものとする故に、**but** を関連性の原則と調和する発話解釈に制約を課す効果的な手段とみなしうるのである。

談話連結語 **but** は概念的でなく手続き的意味を記号化していること、表意でなく推意に貢献するものであるという分析を示した。**But** は真理条件的でないこと、つまり表出命題に貢献しないことを確認しておきたい。

(57) *If Yamada comes from Osaka but he speaks standard Japanese, then we can ask him as an informant.*

話し手はどういう状況で山田をインフォーマントとして頼めるといいたいのか。明らかに (57) の話し手は山田が大阪出身であってもなくても標準語を話しさえすればインフォーマントとして頼めるといっているのであって、大阪出身であることと対照的に標準語を話すからではない。したがって **but** は命題形成に関与するものではない。

4. 処理単位

ここで **and** を再び持ち出し、両者の違いのまとめをする。2-4 で、**P and Q** は連結発話であり、単一の処理単位となり、全体として関連性の見込みを有するという主張をした。一方、**P but Q** 発話の解釈はそれぞれの連言肢が独立し、個々が関連性の見込みを有するとされる。一方の連言肢の解釈が他方の連言肢の解釈に貢献するということが談話連結語の特徴である。つまり、**and** は連結接続詞 (*conjoined conjunction*) であり、**but** は談話連結語 (*discourse connective*) として区別されると主張している。

(58) の例を見てほしい。

(58) a. *Her husband is in hospital and she is seeing other men.*

b. Her husband is in hospital but she is seeing other men.

(Blakemore & Carston 1999)

And で 2 つの連言肢を連結することにより (58a) は「驚いた、信じられない、けしからん」と言った話し手の態度が得られる。このことは全体が単一の単位である証拠となる。一方 (b) は第 1 連言肢から引き出される推論、「配偶者が入院中であれば気の毒だ、大変だろう」という思いをほのめかし、この思いを伝えようとしている。次に第 2 発話をこれと矛盾したものとして処理するよう話し手は伝える。同様に、(59) において、and は二つの連言肢を結び付け、‘in spite of that’ と富化し表意とするだけでなく、二事象の真性の上に話し手の感情的態度（そういう人もいるんだ、信じられないという気持ち）を伝える。一方、(59b) の but は第 1 発話から引き出された推論（日本人ならすし好きに違いない）が見事に裏切られることを伝える。

(59) a. She is Japanese and she hates sushi.

b. She is Japanese but she hates sushi. (今井 2001)

(60) a. Mother wants to go to Hokkaido, my brother wants to visit Universal Studio, I want to go to a hot spring and Father wants to play golf.

b. Mother wants to go to Hokkaido, my brother wants to visit Universal Studio, I want to go to a hot spring but Father wants to play golf.

(60) に見られるように、and は列挙が可能、全体として家族が休暇を取る相談でまとまらないことを伝え、but は最後の節が前の 3 節と対峙し、父親だけが皆と違う、たとえば家族いっしょに楽しめないことをやりたがるということを伝える。(55) における and の使用が (56) のような文脈含意を引き出すという議論を思い出してほしい。

最小の真理条件的意味を and がもっているという立場を維持すれば (58) – (60) の (a) と (b) との対照をどう説明するか、発話解釈の観点から関連性の原則が (a) の発話全体に應用すると考える。つまり最適関連性をもっていると想定されるのは連結命題であり、その命題全体が態度上の

効果をもたらす。一方, (b) の *but* は二つの節が別個の単位として処理され, それぞれが関連性の見込みを伝える。すなわち第 1 発話を処理してそこから引き出される推意をもって第 2 発話の処理にあたるのである。

しかしながら, 有標のケースとして, *and* の談話連結語としての使用 (61) があり, 一方 *but* の連結接続詞としての使用 (62) があると考えられる。

(61) Holmes: The only thing I could come up with was that he was digging a tunnel to some other building.

Watson: And how did you make sure, Holmes ?

(62) Suzan is coming to my lecture but Jane is not.

(61) の *and* は発話の始まりにあり, Holmes による先行発話が *and* 節の関連性に影響するという意味で, 談話連結語的用法であるということである。And がなくても Watson の発話は話を進めるよう促すことでは変わらないが, 先行発話の処理をしてそこから話しを続けるよう *and* 節とのつながりを構築させるのである。富化によって ‘and tell me how you made sure of his digging a tunnel’ という表意を伝えることになる。一方, (62) の *but* は「Suzan と Jane は何をするのも一緒である」という想定を聞き手は持っているという状況で, 先行発話から引き出される「Jane も私の講義に来るに違いない」という推意が *but* 節によって否認されることを聞き手は知らされる。さらに (62) 発話全体として「今日いつもと違う」ことを伝え, 聞き手はひょっとしたら「どうしたのか」という問いを発するかもしれないのである。

連結接続詞として, 談話連結語として両者とも使用されうるのであるが, それぞれの有している意味 (*encoded meaning*) は対照的でありながら一様の意味を記号化していること, 語用論的に導出される意味機能も対照的でありながら, それぞれについては一様に分析されることを示した。

結語

And, but とともに実際の発話における意味は多様であるが, それぞれ多様な表われの下に潜む一様性, 一定性, 不変性を関連性理論の枠組で説

明した。一方、両者はそのエンコードしている意味は対照的であることを、関連性理論の二つの区別概念を用いて示した。次のようにまとめられよう。

(63)	<i>And</i>	<i>But</i>
	logical operator & minimal semantics	procedural encoding constraints on pragmatic inference
	explicit	implicit
	truth-conditional	non-truth-conditional
	conjoined-conjunction / discourse connective	discourse connective / conjoined-conjunction

まず、エンコードしている意味については、**and** は論理演算子の&に等しく、いくつもの、多岐にわたる暗示的意味は発話において定着するものである。さらに明示的側面、すなわち表意に貢献し、真理条件的である。一方、**but** は発話の語用論的推論過程に働き、呼び出した推意の扱いに関する手続きをエンコードし、コンテキスト選択と文脈含意の同定をポイントする。前者の記号化している意味は極めて小さく、かつあいまいなものである。概念を足していく富化操作によって当該の発話に特定の意味が確立する。対照的に、後者はその記号化している意味は極めてはっきりしており、情報の際立ちをポイントする機能を担っている。

第二に、**and** は連結接続詞としての機能が基本であり、**and** で結ばれた二つの命題は **and** が表す推論関係で結ばれ、全体として一つの関連性を有する。一方、**but** は前節と関係付けられる命題が二命題間の推論関係を指示する談話連結語の機能が基本である。しかし、有標のケースとして、**and** の談話連結語の使用、**but** の連結接続詞としての使用もあり得る。

最小の意味論の上に、豊かな語用論的操作によって肉付けしていく形式と、確固とした、意味論的意味を持ち、それが語用論的情報である形

式と、両者はあらゆる意味で対照的であり、言語形式として相補分布的である。この二つの小さい形式の考察は、認知語用論としての関連性理論の説明力を実証することになった。

* 本論文は神奈川大学共同研究奨励助成金(2000-2001年)による研究成果の一部である。

日本語用論学会第4回大会(2001年12月於桃山学院大学)に口頭発表したものに端を発している。これに大幅な改訂と追加を行った。また、ロンドン大学、University College LondonのR. CarstonとC. Itenの授業と議論にも多くを負っている。二人のコメントのみならず、知的刺激と励ましに謝意を表したい。さらに2002年1月から3月在外研修(短期)を許してくれた神奈川大学および英語英文学科の同僚にも感謝する。

注

- 1 関連性理論は人間の精神活動についての一般的、普遍的な想定に基づく認知システム理論であり、その意味で Chomsky と軌を一にしているといえるであろう(生成文法と関連性理論の関係については Carston 2000a に詳しい)。
- 2 たとえば、
 - A. cat: 概念的, 明示的, 真理条件的
 - B. she: 手続き的, 明示的, 真理条件的
 - C. frankly (文副詞としての使用): 概念的, 明示的, 非真理条件的
 - D. imperative mood: 手続き的, 明示的, 非真理条件的
 - E. but: 手続き的, 非明示的, 非真理条件的
- 3 大文字書きに拠って、抽象的な命題表示を表す。また ROOM_x はある特定化された部屋という表示である。(3b の [ぶどう] x も同じ)
- 4 関連性理論のアイロニーの考察については、以下のものに詳しい: Sperber & Wilson (1986/95, 237-243; 1981; 1998), Wilson & Sperber (1992)。
- 5 Because は and と対照的に、原因、理由を表す意を真理条件的に有していると考えられる (Takeuchi 1997 参照)。
- 6 Cohen (1971) はこのことを推意による説明がまちがっていることの証拠であるととり、and が真理関数的意味に加え and then や and because of that の意味を持つ語彙的多義性の立場をとった (Carston 1988)。
- 7 文の意味確程度不十分性は単語の意味にもっと顕著であるといえる。1 つの

語がそのコンテキストで伝える概念は記号化されたものを広げたり（緩めたり）、狭めたり（強めたり）、あるいはその両方によってその意味するところが決まるのが事実である。たとえば、

(i) Lovely.

(ii) Holland is flat.

(i)の lovely によって伝達される意味内容は、人ともとのでも異なるし、程度、タイプ、質的特質もその都度異なる。LOVELY という語が記号化している一般的概念は、コンテキストに応じて特定化された無限の概念を呼び出すのである。(ii)の flat は字義どおりの「平ら」の概念ではなく、緩められて使用されている。LF にある単語の概念が語用論的に緩められたり、狭められたりするはそのコンテキスト限りであるという意味で、アドホック概念形成 (ad hoc concept) である。これは表意を導く 4 つ目の作業である (Carston 1996, 1997, 2000b, 2002; Sperber & Wilson 1997; 武内 2000; 2002a 参照)。

- 8 手続き的情報の記号化は当初は、談話連結語に代表される非真理条件的内容にかかわる言語表現であった。後に表意、すなわち発話の表出命題にかかわる表現にも広げられた（たとえば代名詞）。また疑問文の語順や命令法、発話行為助詞 (please, let's, well, huh など) は手続きを記号化しているが、表出命題ではなく、高次表意に制約を課す言語表現である。Wilson & Sperber 1993a を参照。
- 9 Iten (2000) は Q although P / although P, Q の発話において although は次のような手続きを記号化していると述べている。

Suspend an inference from what follow (i.e. P) which would result in an unresolvable contradiction (181).

参考文献

Blakemore, D.

- 1987 *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Blackwell.
- 1989 Denial and contrast: A relevance theoretic analysis of *but*. *Linguistics and Philosophy* 12, 15-37.
- 1990 Formatives and parentheticals. *Proceedings of the Aristotelian Society* 91. 3, 197-213.
- 1992 *Understanding utterances: Introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell. 武内道子・山崎英一 (訳) 『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門』 1994. ひつじ書房。
- 1997 On non-truth-conditional meaning. *Linguistische Berichte* 8,

- Special issue. 92-1-2.
- 2000 Procedures and indicators: *nevertheless* and *but*. *Journal of Linguistics* 36.3, 463-86.
- 2002 *Relevance and pragmatic meaning: The semantics and pragmatics of discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blakemore, D. and R. Carston.
- 1999 The pragmatics of *and*-conjunction: The non-narrative cases. In *UCL Working Papers in Linguistics* 11. 1-20.
- Blass, R.
- 1990 *Relevance relations in discourse: A study with special reference to Sissala*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carston, R.
- 1988 Implicature, explicature and truth-theoretic semantics. In Kempson, R. (ed.) *Mental representations: The interface between language and reality*. Cambridge: Cambridge University Press, 155-81. Reprinted in Kasher, A. (ed), *Pragmatics: Critical concepts*. London: Routledge. 436-464.
- 1993 Conjunction, explanation and relevance. *Lingua* 90, 27-48.
- 1996 Enrichment and loosening: complementary processes in deriving the proposition expressed ? *Linguistische Berichte* 8, Special issue. 103-127.
- 1997 *Pragmatics and the explicit-implicit distinction*. PhD thesis, University of London.
- 1999 The semantic/pragmatic distinction: a view from relevance theory. In Turner, K. (ed.) *The Semantics/pragmatics interface from different points of view*. Elsevier Science, 85-125.
- 2000a The relation between generative grammar and (relevance-theoretic) pragmatics. *Language and Communication* 20, 87-103.
- 2000b Explicature and semantics. *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 1-44.
- 2002 *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*. Oxford: Blackwell.
- Carston, R. and S. Uchida(eds.)
- 1998 *Relevance theory: Applications and implications*. Amsterdam: John

Benjamins.

Grice, H. P.

- 1976 William James Lectures. Printed in Grice, H. P. 1989. *Studies in the way of words*. Cambridge MA: Harvard University Press.

Fraser, B.

- 1998 Contrastive discourse markers in English. In Juckrer, A. and Ziv, (eds.) *Discourse markers: descriptions and theories*. Amsterdam: John Benjamins. 301-326.

今井邦彦

- 2001 『語用論への招待』 大修館。

Iten, C.

- 2000 *Non-truth-conditional meaning, relevance and concessives*. PhD Thesis, University of London.

Lakoff, R.

1971. *If's, and's and but's about conjunction*. In Fillmore, C. and D. T. Langendoen (eds.), *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt Rinehart & Winston. 114-149.

Rieber, S.

- 1997 Conversational implicatures as tacit performatives. *Linguistics and Philosophy* 20. 51-72.

Sweetser, E.

- 1990 *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D.

- 2000 Metarepresentations in an evolutionary perspective. In Sperber, D. (ed.) *Metarepresentation: A multidisciplinary perspective*. Oxford: Oxford University Press. 117-37.

Sperber, D. and D. Wilson.

- 1981 Irony and the use-mention distinction. In Cole, P (ed.), *Radical*

- pragmatics*. New York: Academic Press. 295-318. Reprinted in Davis, S. (ed.) 1991. *Pragmatics: A reader*. Oxford: Oxford University Press. 550-563.
- 1986/95 *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell. 内田聖二他 (訳) 『関連性理論—伝達と認知』 1993/1999. 研究社出版。
- 1995 Postface. In Sperber, D and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and cognition*, 2nd edn. Oxford: Blackwell. 255-79.
- 1997 The mapping between the mental and the public lexicon. *UCL Working Papers in Linguistics* 9, 107-25. Reprinted in Carruthers, P. and J. Boucher, (eds.) 1998. *Language and thought: Interdisciplinary themes*. Cambridge: Cambridge University Press. 184-200.
- 1998 Irony and relevance: a reply to Seto, Hamamoto and Yamanashi. In Carston, R. and S. Uchida (eds.), 289-93.
- Takeuchi, M.
- 1997 Conceptual and procedural encoding: Cause-consequence conjunctive particles in Japanese. *UCL Working Papers in Linguistics* 9, 127-184. Reprinted in Rouchota, V. and A. Jucker (eds.) 1998. *Current issues in relevance theory*. Amsterdam: John Benjamins. 81-103.
- 1999 The Japanese adverbial DOOSE. *Kanagawa University Studies in Language: festschrift for the retirement for Prof. Tetsuya Kunihiro*. No. 22. 13-30.
- 武内道子
- 2000 「論理形式と表意」 『英語青年』 第 46 巻 第 7 号 433-435 (2000 年 10 月号 17-19)。
- 2001 「「どうも」と関連性」 『ふじみ』 第 21 号 富士見言語文化研究会 31-40。
- 2002a 「言語形式の明示性と表意」 『英語青年』 第 48 巻 第 4 号 240-241 (2002 年 7 月号 36-37)。
- 2002b 「関連性理論の意味論」 『英語青年』 第 48 巻 第 10 号 638-39 (2003 年 1 月号 38-39)。
- Wilson, D.
- 1999 Metarepresentation in linguistic communication. *UCL Working Papers in Linguistics* 11, 127-61. Reprinted in Sperber, D. (ed.) 2000. *Metarepresentations: A Multidisciplinary perspective*. Oxford:

Oxford University Press. 411-48.

Wilson, D. and D. Sperber.

- 1981 On Grice's theory of conversation. In Werth, P. (ed.) *Conversation and discourse*. London: Croom Helm. 155-78.
- 1992 On verbal irony. *Lingua* 87, 53-76.
- 1993a Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, 1-25.
- 1993b Pragmatics and time. *UCL Working Papers in Linguistics* 5, 277-98. Reprinted in. Carston, R. and S. Uchida (eds.) 1-22.
- 2000 Truthfulness and relevance. *UCL Working Papers in Linguistics* 12, 215-54.